

ニューディール期における「理想」の「身体」 — 「人種」から「マシーン」へ（１）

中村嘉雄*

An “Ideal Body” in the New Deal—“Race” into “Machine”

Yoshio Nakamura

Abstract

It is generally said that eugenics up to the 1920s was gradually declined and abandoned according to upheaval of the Nazi regime, and global denunciation of its inhumane racial discrimination in the 1930s. In addition to such global criticism, in America, according to Franklin D. Roosevelt's New Deal, once eugenically-defined “inferior” races, whose “germ plasm” eugenics had tried to eradicate from society, was re-incorporated into the American economic system; their re-defined racial presence in society as “cultural diversity” accelerated such incorporation in America. Then, was eugenics completely abandoned in history in the New Deal? This study's goal is to verify that eugenics was still alive in the New Deal, its main principles altered by and succeeded over into industrial designers and their “streamlined” machines. In this thesis, such echoes of eugenics are investigated and detected in the February 1, 1939 issue of *Vogue*, which, tying up with the New York World's Fair 1939, featured “the woman of tomorrow” and industrial designers' costume designs for the “new” woman.

This work was supported by ISPS KAKENHI Grant Number JP18K00403.

Keywords: the New Deal, the New York World's Fair 1939, echoes of eugenics in the February 1, 1939 issue of Vogue.

序

ニューヨーク市のクイーンズ区フラッシング・メドウズ・パークで1939年4月30日に開幕したニューヨーク万国博覧会は、巨大な三角の塔「トライロン」(the Trylon)と、おなじく巨大な球体「ペリスフィア」(the Perisphere)からなるモニュメント、「テーマ・センター：デモクラシティ」(the Theme Center-Democracy)を博覧会の象徴に、ちょうど凱旋門からパリ市街が放射状に展開するように繰り広げられた。ナチズムの独裁政治や人種差別政策に世界が動揺するなか、この「テーマ・センター：デモクラシティ」はアメリカの「民主主義」への信頼と自信の表明でもあった。¹そして、この「テーマ・センター：デモクラシティ」の役割を考えると、もう一つの重要な側面が、当時の大統領F.D.ルーズベルト(Franklin Delano Roosevelt)(以降、FDRと略記)が、世界が進むべき「高尚な目標」(high objectives)と呼ぶ、「機械」と「科学」の未来像だ。²

工業デザイナー、ヘンリー・ドレイファス(Henry Dreyfuss)設計の近未来都市をフィーチャーした「デモクラシティ」の「ペリスフィア」内部には、アメリカ郊外の住宅モデル「サテライト・タウン」(Satellite Town)のミニチュアが広がっている。観覧者たちは、この近未来の巨大なパノラマ・タウンを長いオートマチックの階段に乗って、まるで天空に昇るかのように眺める。そして、アトラクションの総仕上げが、未来都市パノラマの頭上、夕暮れの薄暮の空を背景に繰り広げられる農民と機械工の行進だ。その行進は、「無数の星々」(myriad stars)に彩られ、「天から届く幾千もの声からなるコ

ーラス」(Official Guide Book 27)をバックに観覧者を魅了する。

「ペリスフィア」の外にも、この「農業」と「機械」の未来を象徴する像が観覧者を待ち受けている。この「テーマ・センター：デモクラシティ」の東側すぐのところには「力の庭」(the Court of Power)があり、そこにはジョン・グレゴリー(John Gregory)製作の彫像「平和の四つの勝利」(Four Victories of Peace)が配置されている。それは、お互いがそれぞれ背を向けあって立つ、四体の女性像で、それぞれの手には「車輪(wheels)、翼(wings)、小麦(wheat)、知恵(wisdom)」の象徴が持っている。つまり、アメリカ、そして世界の未来は、「車、飛行機」、「農業」を展開・発展させる「科学」によって実現されるというわけだ。³

こういった万博の「機械」と「科学」の未来像を10年ほど前のアメリカと比べてみるとそのギャップに驚いてしまう。とくに、当時の大統領FDRや万博のプレジデント グローバー・A・ホエーラン(Grover A. Whalen)がいうように、万博の未来像が、世界の民族の「相互依存関係」(interdependence)、つまり民族的協働によって実現されるとなるとそのギャップはさらに大きくみえる。1920年代、チャールズ・ベネディクト・ダヴェンポート(Charles Benedict Davenport)を中心とする当時の優生学研究は、東欧移民との混血によって、アメリカ民族が将来滅亡する危機にあることを警告し、人々を民族退化の恐怖に陥れた。その恐怖は、実際、アメリカン・フロンティアズマンである民兵、兵士に施されたIQテスト結果や、ダヴェンポートの娘ジェーン(Jane Davenport)によって製作された平均的アメリカ兵の像—退化の実例として報告された—によってさらに増幅され、アメリ

カへの移民を実質的に制限する1924年の「移民法」(Immigration Act of 1924)にまで至る。⁴それが、1939年のニューヨーク万博では、わずか10年たらずで、まるでこの民族退化の恐怖は忘れ去られたかのように、民族の強調、協働路線による「機械」と「科学」の未来が大大々に繰り広げられるのだ。この二つの時代のギャップはいったいどのように説明できるのだろうか。

本論の目標は、この社会政治的なギャップに連続性を見いだすことにある。つまり、1920年代の優生学的思想は否認され、忘れ去られたのではなく、換骨奪胎されて、30年代のニューディール、1939年のニューヨーク万博の「機械」と「科学」の未来へと受け継がれるのだ。⁵そして、「優生学」と「機械」、この二つの時代的キーワードをつなぎ、その強力なメディアの役割を担うのが、1939年のニューヨーク万博で活躍する30年代の工業デザイナーたちなのだ。では、工業デザイナーは、優生学と「機械」「科学」をどのように結びつけるのだろうか。そのメディア的な戦略とはどのようなものなのだろうか。

「未来の娘たち」＝優生学＋機械

まず、手始めに、1939年のニューヨーク万博の「機械」と「科学」の未来像の優生学的影響を確認しておこう。その手がかりとなるのが、女性ファッション雑誌『ヴォーグ』(Vogue)誌の、1939年のニューヨーク万博特集だ。1939年2月1日に発行されたアメリカ版『ヴォーグ』誌は、その表紙に、1939年のニューヨーク万博で壁画を手がけたヴィトルド・ゴードン(Witold Gordon)が描く、頭に「トライトン」と「ペリスフィア」をいくつも繋げた冠の「自由の女神」の絵を採用、1939年のニューヨーク万博の特集を組む。フィーチャーするのは世界的女性ファッション誌らしく、「未来の娘たち」とそのファッションだ。

そもそもファッション誌は、「理想」的な「身体」をモデルにモードのファッションを提供するわけだから、おなじく「理想」的な人種や民族を生み出し、増やそうとする優生学と似たところがある。だから、ニューヨーク万博とタイアップした『ヴォーグ』誌特集の「理想」的な女性とそのファッションにもなんらかの優生学からの影響が見られる可能性がある。

たとえば、エッセイ「未来の娘たち」(“Tomorrow’s Daughter”)では、宇宙に浮かぶ「トライトン」と「ペリスフィア」を背景に、ドレープをまとい、頭に星を散りばめた、ギリシア像を思わせる女性の写真とともに、「未来の女性」(“the Woman of Tomorrow”)が特集される。そこには優生学の影響がはっきり見て取れる。

まず目を引くのはアーリア人種的な美のフォーミュラだ：

Tomorrow’s American Woman may be the result of formulae—the tilt of her eyes, the curve of her chin, the shade of her hair ordered like crackers from the grocer. She may be gentle, sympathetic, understanding—because of a determinable

combination of genes. She may be a part of America, the world-power; or of America, the absorbed state.⁶

目の傾き、顎の曲線、髪の色合いといった基準は、優生学が賛美したノルディック的な美(＝古代ギリシア的な美)の基準をそのまま受け継ぐかのようだ。そして、その影響の可能性をさらに強めているのが「遺伝子」(genes)という語だ。エッセイによると、「遺伝子の組み合わせ」によって、「未来の女性」は「優しく、思いやりがあり、理知的」になると予言される。このように、女性を「知」の領域から締め出し「感情的」な世界に閉じ込めようとした19世紀とは正反対の、「科学」的な未来の女性像が展開される。⁷

とはいえ、ナチスの人種差別政策への批判から、優生学と距離をとりつつあった当時のアメリカを考えてみると、この「遺伝子」という言葉を筆者は真面目に使っていない可能性もある。未来の女性が、「グローサリーのクラッカーのように注文」できるというのだからなおさらだ。しかし、その未来像が単なる希望的な予測でなく、当時の「現実の祖先」(her earthbound progenitor)が進化したものだとなると、「遺伝子の組み合わせ」のクラッカーのような未来予想図も、あながち突飛でふざけたものと言えなくなる。筆者が使っている「祖先」(progenitor)という言葉も「遺伝子」(genes)を連想させるから、この未来予測もかつての優生学のように、当時の「遺伝」的とされる情報、つまり「現実」に即した(earthbound)「科学的」なものとも考えられる。

そして、こういった未来の女性や社会は「機械」的なのだ：

However, this is how we like to think of the American Woman of To-morrow: That her face will be beautiful, but that beauty will not be merely an “assembly-line” product. That her body will be a perfectly-working machine.... That her mind will work clearly, unfogged; with cold logic and warm sympathy. That her spirit will be eager and soaring—but controlled by the knowledge that for her, too, there will be a Woman of To-morrow. (61)

未来の女性の「美」は「アセンブリー・ラインの品」であり、また「完璧に機能するマシーン」でもある。「怜悯な論理」、「熱意ある上昇志向」といった精神性も取り上げられるものの、それは「論理」によって「制御される」(controlled)、「美」と「機能」を兼ね備えた「機械」なのだ。さらに、それは、「遺伝子の組み合わせ」によって産み出される。どうやら、この「機械」的な「未来の女性」は、「理想」の遺伝子をもつ「スーパー」な民族を追求する優生学的人間像の進化した姿のようなのだ。

「ラボのガラスチューブ」で生産される未来社会

こういった「機械」化された近未来の女性は、当時『ヴォーグ』誌に加わって3年目のコラムニスト、アレーネ・タルミー(Allene Talmey)の未来予想図にも確認できる。同じ『ヴォーグ』誌特集号のエッセイ、「我々が決して知ることのない世界」(“A World We’ll Never See”)で、タルミーは「機械」

的に管理生産される試験管ベビーの未来を予測する：

...there will be one vast differentiation; reproduction will be separated from marriage. Somewhere along about 2050 A.D. the first ectogenetic child, fertilized and grown in a glass tube in a laboratory, and then born outside the mother's body, will be just entering school. ... Genetics, by then, will be an old story. By the right combination, which almost anybody can reason out mathematically then, the world will have the kind of people the world wants. If some one wants them, it will not be difficult to produce some "fifty-thousand irresponsible, if gifted, mural painters. (164)

タルミーの予測では、近未来の「生殖」(reproduction)は、「結婚」の制度とも男女の「性」の営みともまったく切り離される。それをつかさどるのは「実験室のガラスチューブ」である。このタルミーの近未来試験管ベビー社会は、1932年に発表されたオルダス・ハクスリー(Aldous Huxley)の近未来ディストピア小説『すばらしき新世界』(*Brave New World*)の社会・出産システムとよく似ている。ハクスリーが想像する近未来社会も、試験管の中で「アルファ」、「ベータ」、「ガンマ」、「デルタ」、「イプシロン」の階級に合わせ能力を調整されたクローンだらけの世界だ。⁸

ところが、いざ「人種」のこととなると、タルミーとハクスリー、お互いの予想は随分違ったものになる。それぞれの作品が出版された時期は10年の違いもないのだが、たとえば、ハクスリーの『すばらしき新世界』では人種・民族の違いは決して乗り越えることのできない社会的な壁となる。たとえば、「蛮人保存地区」(the Savage Reservation)で「混血児」として生まれたサヴェッジ(Savage)は結局、バーナード・マルクス(Bernard Marx)やレーニナ・クラウン(Lenina Crowne)たちの住む社会に留まることなく、「蛮人保存地区」へ自ら戻っていく。一方、タルミーの未来社会では、優生学が区別するようなアーリア人、黄色人、黒人等の人種は、「モンゴロイド」によく似た同じ人種に統一される：

Through genetics, natural amalgamation, and some force that no one can quite put his finger on, there will be one race. Man will be pale, with a coffee-coloured skin, Mongoloid eyes, and he will be only a little shorter than the average English-man today. Woman, however, will be about six feet tall, with muscles bulging like a bag of oranges, and she will be definitely be the sum of enchantment. (164)

この両者の違いは、1920年代と1930年代の、アメリカにおける人種・民族観の違いから説明できるだろう。おそらく、ハクスリーの人種観には混血や東欧移民を「劣等」と決めつける1920年までの優生学的先入観が強く働いている。一方、タルミーのそれは1930年代半ば以降の、従来の優生学的な人種概念を「文化的多様性」として解釈し

直すことで、いままで差別をしてきた人種・民族をも経済構造に引き込もうとするニューディール期の人種・民族的政策を示唆するものだ。

しかし、この「文化的多様性」を尊重するニューディールの人種観を理由に、タルミー、あるいは当時のアメリカが優生学から距離を取り始めたとみなすことは難しい。というのも、人種的な「劣等」性と同様、優生学が遺伝子の「劣等」性を指摘してきた犯罪者や、肺炎やガンなどの病、そして寿命の話となると、タルミーの口調は優生学者のそれにかかなり接近してくるからだ：

Criminals, of course, will not be allowed to be born, cancer and tuberculosis will be curable, and there will be prolonged local anesthetics. Communities will have a planned birth-rate, and the population will be kept at a fixed level, but, before that gets working properly, there may be a rejuvenation problem, for old people will not die off, and infant mortality will be nothing. Any one who sneezes in public will be imprisoned. (164)

20世紀初頭、優生学がアメリカ社会に受け入れられ大きな影響力を持った主な理由の一つは、当時押し寄せてきていた、東欧からの移民たちが病気や犯罪の遺伝的傾向を持っており、彼らの血が混ざることによって、アメリカを滅ぼしてしまうと考えられたからだった。そして、そういった人種とその血を病気や犯罪の原因とみなす考え方は、たとえ優生学者ではなくても当時のアメリカに広く受け入れられていた。たとえば、1891年に『ユダヤ人の統計的研究』(*Studies in Jewish Statistics*)を記したジョセフ・ジェイコブズ(Joseph Jacobs)によれば、ユダヤ人の「同族婚」は、先天的な聾啞、白痴を引き起こし、ユダヤ人と他人種の婚姻は「不妊」になるとされていた(Jacobs "Appendix" iv-v)。また、1899年のウィリアム・Z・リプリー(William Z. Ripley)の『ヨーロッパの人種』(*The Race of Europe*)によると、当時多くの研究者は、ユダヤ人種は「胸が小さく、肺の容量の欠陥」をもっており、それは、「生命力」の欠如を意味すると考えていたことがわかる(Ripley 382)。この二人は優生学者ではないし、またユダヤ人差別を容認しているのでもない。むしろ、彼らはユダヤ人を擁護する見解もそれぞれの研究で示している。しかし、彼らのようなユダヤ人差別と無関係な学者も、ユダヤ人の病気と遺伝の関係を研究対象とせざるをえなかったという事実が、当時アメリカで人種とその血を特定の病気と結びつける傾向がいかに強かったかを示している。

さらに、1910年代になると、アメリカでは、人種に加え、様々な「障害者」(defectives)の探索とその家系調査が行政レベルで実施されるようになる。1910年、ニューヨークのロングアイランド、コールド・スプリング・ハーバーに「優生学記録所」(Eugenic Record Office)が設立され、そこを拠点に、「精神薄弱者」(the feeble-minded)、「精神障害者」(the insane)、「犯罪者」たちの探索と、その家系調査が行われた。ニューヨーク州では、「産業移民局」(the Bureau of

Industries and Immigration)が、アメリカにやってくる移民たちの「障害者」とその家系調査に乗り出し、「ニューヨーク市警察」(New York City Police Department)では署内に、反社会性人格障害者を研究する優生学的調査施設が立ち上がり、犯罪者とその家系、血の調査が行われた。⁹

『ヴォーグ』誌のタルミーの記事と同じ1939年、この「優生学記録所」は役割を終えるのだが、犯罪者と血の研究は引き続き行われていた。それを示すのが、同年に発表された、ハーヴァード大学の自然人類学者アーネスト・アルパート・フートン(Earnest Albert Hooton)の著書『犯罪と人間』(*Crime and the Man*)だ。フートンは、その著書でどの人種がどういった犯罪傾向にあるのか、つまり、犯罪と人種的遺伝との関係を統計学的に調査した。もちろん、当時ナチスの人種主義政策が世界的に非難されていたから、フートンもこういった人種的遺伝の研究の危険性を理解していた。『犯罪と人間』のなかで、彼はファシズム国家の人種政策を：

All of the trash about Nordics and Aryans which has been trumpeted by the dictators of Fascist states and by their kept professors can be dismissed as barefaced lies, which no one with a knowledge of anthropology and with the slightest rudiment of scientific judgment believes. (Hooton 248)

と避難する。しかし、「殺人」、「窃盗」、「詐欺」などの犯罪となると話は別だった。フートンのいうように：

the 'pure' racial types are those which are most sharply delimited in their criminal proclivities, and often also in their educational attainments and in their choice of occupations. (Hooton 249)

そして、この人種の種類は「血」の問題、遺伝的問題であった：

Each [race] produces its pitifully few men of genius, its hordes of the mediocre, its masses of morons, and from the very dregs of its germ plasm, its regiments of criminals. (Hooton 252)

このように、「遺伝子のクズ」から、「犯罪者集団が生まれる」というのだ。たしかに、フートンも：

Every race is criminalistic, and within every race it is the biologically inferior—the organically unadaptable, the mentally and physically stunted and warped, and the sociologically debased—who are responsible for the majority of the crimes committed. (Hooton 252)

などと、奇妙な人種の「犯罪の平等性」を挙げて、自分の研究がナチスの人種差別をなんら助長するものでないことを強調する。しかし、結局のところ、フートンの問題もナチス

と同様、いかに「劣等」とみなされる人種・民族の遺伝子を管理・制限し、排除していくかにあるのだ。もちろん、フートンはナチスのように犯罪者の「劣等」遺伝子を排除すべきであるなどと明からさきに主張してはいない。暗に「科学的」な証拠を挙げながら、「そうすべき」旨を示唆しているに過ぎないといえる。おそらく、ナチスの人種差別に敏感だった当時のアメリカの世論を考えると、人種差別的な論旨は反感を招きかねないし、「文化的多様性」を掲げるニューディールの人種・民族政策にも反するものだった。だから、タルミーのように「ラボのガラスチューブ」を使った、SFチックな「未来予測」としたほうが、「劣等」遺伝子の排除を語りやすいのかもしれない。非難されるなら、タルミーのタイトルが示すように、「我々が決して知ることのない世界」(“A World We'll Never See”)の問題というわけだ。しかし言い方はどうであれ、同時代のフートンの研究、そしてタルミーの試験管ベビーの未来像の根底には、「犯罪」や「病」を遺伝と結びつける優生学的な「血」の思想がいまだに脈打っているのだ。

註

1 民主主義について、万博の公式ガイドブックにはつぎのように記されている：

アメリカの民主主義の実験はもう長い間その実験としての役割を終えている；そのアメリカの理想は世界に対して幅広くかつ実りのある影響を与えてきた。万国博覧会は民主主義を、あらゆる自由と機会を持つ一つの政治の形、そして、一つの人生の形として褒め称え、賛美する。(Official Guide Book 26)

2 ニューヨーク万博のコンセプトとテーマについては、『オフィシャルガイドブック』26-27に詳しい。そこで、FDRは、万博の目的として、「高い目的意識を持ち、自分たちの評価する、未来への大胆な試みに向かってチカラを一つにすることは、世界の国とコミュニティを奮い立たせるものだ」と述べる。

3 アメリカの20世紀初頭の農業の特徴は「機械化」、つまり、「トラクター」の開発、販売競争の歴史でもある。詳細は、藤原辰史『トラクターの世界史』第2章を参照のこと。さらに、1932年に発行された、アメリカの今と将来を写した写真集『アメリカの写真』(*A Picture of America*)では、表紙に「トラクター」のコラージュ写真が用いられ農業の「機械」化がアピールされている。

4 詳細は、近刊の共著書『アメリカン・モダニズムと大衆文学—時代の欲望/表象をとらえた作家たち』の、中村嘉雄「優生学とヘミングウェイ人種的レトリックの『大衆』戦略」を参照のこと。

5 一般的に、アメリカでは、20年代までのアメリカの優生学とそれをもとにした政策は、30年代、ナチスの人種差別的な政策への反発から次第に影響を失っていくとされる。のちに触れるが、この優生学的人種観に取って代わるのが、ニューディールの、30年代半ば以降の「文化的多様性」を重視した人種観である。詳細は、宮本陽一郎『モダンの黄昏』第9章を参照。

6 詳細は、『ヴォーグ』61頁を参照。以降、『ヴォーグ』からの引用は頁数のみを括弧に示す。

⁷ 例えば、19世紀アメリカにおける医療専門家の興隆、フロレンス・ナイチンゲール(Florence Nightingale)がクリミア戦争の最前線で作り上げた女性の天職としての「看護婦」のイメージを考えてみればいい。詳細は、B. エーレンライク・D. イングリシュ『魔女・産婆・看護婦：女性医療の歴史』の「女性とアメリカの医療専門家の興隆」の章を参照のこと。

そして、医師という科学の世界からの女性の排除と「看護婦」という職業の成立について、B. エーレンライク、D. イングリシュはつぎのように述べる：

看護婦が理想的女性とすれば、医師は知性と行動と抽象的理論と滅多に動じない実用主義を統合した、理想的男性であった。女性の看護婦への適性が、医師への道を閉ざすことになった。逆も同様だった。女性の優しさや生来の超俗性は過酷で直線的な科学の世界に合わず、男性の決断力と好奇心は長時間患者の面倒を見るのに向かないとうのだった。 (『魔女・産婆・看護婦：女性医療の歴史』 59)

⁸ ハクスリーが描く遺伝子操作による生殖、社会的階級については『すばらしい新世界』第1章を参照のこと。

⁹ 詳細は、Edwin Black 93-96 を参照のこと。

Works Cited

- Barker, Roland, et all. *Official Guide Book: New York World's Fair 1939*. Exposition Publications, Inc., 1939.
 Black, Edwin. *War Against the Weak*. Thunder's, 2003.
 Cross, Charles. *A Picture of America*. Simon and Schuster, 1932.
 Hooton, Earnest Albert. *Crime and the Man*. Harvard UP, 1939.
 Huxley, Aldous. *Brave New World*. Harper, 1932.
 Jacobs, Joseph. *Studies in Jewish Statistics: Social, Vital and Anthropometric*. D. Nutt, 1891.
 Ripley, William Z. *The Race of Europe*. D. Appleton, 1899.
 エーレンライク, B.・イングリシュ, D. 『魔女・産婆・看護婦：女性医療家の歴史』長瀬久子訳 (法政大学出版局、1996)
 中村嘉雄 「優生学とヘミングウェイ—人種的レトリックの『大衆』戦略」『アメリカン・モダニズムと大衆文学—時代の欲望/表象をとらえた作家たち』藤野功一編 (金星堂、近刊)
 藤原辰史 『トラクターの世界史：人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』(中公新書、2017)
 宮本陽一郎 『モダンの黄昏』(研究社、2002)

本研究はJSPS科研費JP18K00403の助成を受けたものです。

(2018年11月 5日 受理)